年少組、第二保育期

――滿四歲、滿五歲――

生活訓練

第四週

こゝでは運動會の練習の時、たゞ競技運動の練習ばかりでなく、出入、集合、歩行等の訓練を與へることになつてゐる。丁度秋も半ばに近く、どこでも運動會が催されるであらうが、必ずしも運動會と限らず、かうした集合動作の訓練は、いつでもして置きたいことである。興味と興奮とにつられてのことではあつても、たゞ騷々しく、不規律に、亂雜になり易いのを、どこかで引きしめておきたい。否、內から亂れない癖をつけて置きたい。

ところで、そういふ癖をつけるには、そういふ機會を度度繰りかへし〳〵與へるのが第一であるが、その都度一番肝心なことは、先生の執る態度であらう。つまり、先生がそわ〳〵、ちら〳〵、ちよこ〳〵してゐては子どもの動きもそうなる。先生はどこまでも落ちついてゐなければいけない。どつしりとね。そして騷ぎ動くものがある時は、簡潔な言葉、簡單な動作で、それを押へるのである。一人が出過ぎたといつて、先生まで一々駈け出したのでは、全體がざわついて仕舞ふ。幼稚園の先生は、前かゞみに子どもに觸れ、子どもに語るのが常の態度であり、必要な態度でもあり、やさしい態度でもあるが、それは一人々々への場合であつて、斯うした全體的の時には、集團の中幹として、眞直ぐに立ち、首を屈めないで、子どもの方をして仰ぎ見せしめる位の方がいゝ。といふと大層つんとして威張つてゐるやうであるが、そうして顏はやさしさにこぼれてゐら

れる。一人々々へ萬遍なく愛想をまき散らそうとすると、まとめてゆく力が弱くなる。まとめ方といふよりも、自分が中心になつて、自然に全體がまとまるようにするのが肝心である。

子どもだからといつて、皆が皆亂れるものではない。その中に特別のはしやぎ家、ちよこまかさんがゐるのである。それを自分の身近かに置いて、特別の注意を拂つてゐることは大切である。又、そういふ子どもと他の子どもとの列び方を豫めよく氣をつけるのも大切である。つまり、前以て工作を試みておくのである。これ等の注意が行き屆いてゐれば先生はそう〳〵こわい顔をして、にらみつけてゐなくもていゝであらう。若しそれでも騷ぎ亂れる常習犯が居たら、時にはドカンと一喝を落しておくのもいゝであらう。腹の中では、その子の無邪氣さが可愛いく、ほゝ笑ましさに笑つてゐても。

第五週

庭の花や木に水をやり、草をとるといへば、花を摘みとらぬようにといふ消極的公德注意と違つて、一面は植物愛育、一面は小勤勞の積極的訓練に入つたのである。といふと訓練が一層むづかしくなつたやうであるが、子どもとしては、消極的に訓練されるよりも、積極的に訓練される方が、その生活內容に於て樂しいのである。平な言葉でいへば、うれしがつてするのである。花をとるなよりも、花に水をやれの方が、自分でも一とかごのことをさせられてゐる喜びがある。草とりは、仕事としては消極的のことだが、おゝきれになつたといはれるところに積極味がある。そこで、折角くかういふ傾向が子どもの自然にあるとすれば、それを育てゝまめな性質に癖づけることは必要である。植物に對するやさしみの教育といふやうな情味の方の教育價値の他に、生活態度の傾向を積極的にする點に於て、一層の訓練價値があるのである。

そして、この訓練では、すなはち生活態度の積極的訓練には、先生が自らそういふ態度を以て誘導することが何より有效である。先生の性質がそう〳〵一々子どもにうつることも限らないかも知れないが、少くも、まめな先生と、不精の先生とでは、その幼兒がちやんと其のお弟子になるから

怖ろしい。口でばかり上手に指導して、自ら手足を動かさない先生の組子には、口さき達者の不精者が多くなる。幼稚園の先生は工事人足の現場監督ではなし、立つて見張つてゐるのでは何んの誘導にもならない。

第六週

まだ〳〵前からのことが、よく癖づけられてゐない。

第七週

砂場の砂を外へ持ち出さないようにといふことは、持ち出したからとて悪い譯でもないのを止めるので、子どもとしては、何故いけないのか合てんに苦しむかも知れない。砂がへるからといふのが一つの理由、外がよごれるからといふのが一つの理由、多分その他に理由もないと思ふが、ごつちの理由にしたつて、スナ、スナ、スナと大聲にわめき立てる程のことではない。海岸の子どもでなくても、此の夏を海岸で過した子どもなら、幼稚園とは砂ひとにぎりにも小やかましいところだなと思ふに相違ない。だから、だからといつて無暗に砂を運び出されては困ることに相違ないので、よく譯を話し(幼稚園の會計の内幕まで話さなくてもいゝだらうが)て、そうしないことにして貰ふことである。少くも、そういふ氣持ちで出るべきである。一人々々が砂を持ち出すと、あとが少くなつて遊ぶのに困るからね。とでも理解を求めて。

一つ思ひ出した話がある。餘程以前のこと、大阪江戸堀幼稚園で、私の砂禮贊說に從つてといふ譯でもないが、まあそんなきつかけもあつて、砂場に大に力を入れられたことがあつた。私の持論の砂場天井をつけたりして、設備もよくされたが、第一砂を豐富に入れた上(當時の幼稚園には、砂場といつても砂の淺い、潮干でなく砂干のような貧弱なのが少なくなかつたのである)、砂箱といふ名で、小箱に砂を入れ、幼兒銘々にあてがふといふところまで奮發せられた。奮發といふと可笑しいようだが、あの大阪西區江戸堀では、砂一升金一升でもあるまいが確に奮發の部に入ることなのである。そこで話は少し後になつて、どうです、子どもは大よろこびでせうねと私が尋ねると、其の園長の膳さんが、あのふくよかな童顏を一段とにこやかにして、

えゝ〳〵、大よろこびで御ざいます。うちへまで持つて歸りますと位でこ答へられた。その話を壓縮して、手つこり早くいへば、幼稚園が幼兒の家庭にまで砂の供給者になつたのである。ハンカチへ包んだりして、もて歸りますのやこ輕く大阪辯のまぢつた、なごやかな答をきいて、流石に膳さん(あの元老の膳眞規子女史)だこ私は大に敬服したのであつた。——何も皮肉をいつてゐんじやありません。たゞ一寸思ひ出した砂場美談の一節だけのここ。

第八週

席を立つた後、椅子を机に引き寄せておくここは、椅子生活こしては、極く當りまへの一作法である。椅子から立ちつぱなしなんていふのは、談判破裂の時かなんかのここである。第一、立つ時一寸手を椅子にかけるのが普通で、さうすれば、その力で一寸もこへ引きつけるここになるのである。こころが、椅子は脚の仲間だこでもいふここか、手なごかけないで(勿論お客樣が食卓へおつきになる時にはボーイが來て椅子を引く)一切の仕末を足で扱つて仕舞ふ流儀もある。あの流儀でいけば、立つた後の始末も、足で器用にするここになるのは自然だが、あれは甚だ以てよろしくない。犬じやあるまいし、そんな後足藝(アトアシ)なんか覺へさせなくてもいゝ。いくら先生がお上手、否お上足だつても。……いやこれは失禮。

誘導保育

第四週

おもちや屋

蟲への興味も薄らいで來た。お神輿の騒ぎも沈まつて、今度は落ちついて仕事の出來るものが好ましくなる。そこでおもちや屋が計畫された。

先づお店が作られなければならない。店は間口二メート